



現代の子育て世代が、何を求めているのか、私たち助産師の役割発揮はどこに焦点化することが望ましいのか？を情報収集し時代に合った支援をすることが重要です。

助産師の歴史的活動を振り返ると、家族の生活に密着し、家族を丸ごととらえその家族の人生を支援していたと考えます。「親族ネットワーク」が大きな支援力を発揮し、地域とのつながりが深く助け合いの子育てが展開出来ていました。しかし、現代は母親の孤立化は増大し、ネットワークの狭さや希薄のため、不安や悩みを抱え相談できずに自己を追い詰めながら子育てをする人も多く存在します。本来、可能性のあるこどもの人格を育てることは、ともに成長できる楽しく素晴らしい仕事が育児です。本来の育児のあるべき姿を目標に助産師が中核となり、子育て支援センターなどのシステム化をし、母親や家族の支援をするとともに合わせて、災害時対策として助産院が地域の拠点となり、助産師が災害リエゾンとして有事の際にマネジメントできるシステムを目標に活動をします。



2019年6月27日(木)に、「第1回神奈川県助産師会地区別連携集会」を開催いたしました。

当会は、現在約600名の会員を抱える全国でも大きな組織ですが、かねてから会と各地区また各地区同士の関係性を深めて、もっと繋がりのある組織にできないものと想っておりました。そして、昨年度からこの集会の準備を進めこの度の開催に至りました。①川崎②横浜③横須賀・鎌倉・三浦④湘南地区⑤相模原・県央⑥西湘から県下6地区の代表の方々8名、会長はじめ理事8名、計16名が会し、産後ケア・産後健診・新生児訪問・聴覚検査等についての情報交換や、地区割りの検討、災害対策の方向性など、内容の濃い集会となりました。代表者の皆様にはお忙しいなかでのご出席とご協力に感謝申し上げます。今後も皆様との連携を基に、神奈川県全体の母子保健の向上や、災害対策の体制の構築に繋げていく所存です。会員の皆様もご協力の程よろしく申し上げます。

今後の活動が楽しみです！

Advertisement for Madonna Breast Care products, featuring images of the product and text: 天然成分100%, 乳頭キレツのケアに!, TEL.0120-39-1433.

Advertisement for TERNES Hand Cream series, featuring images of the product and text: 保湿成分「羽毛ケラチン」のバリア機能, プロテクトクリーム, プロテクトローション.

編集後記

会の事業や活動が見えるニュースレターを目指し、委員一同活動しています。ご意見、ご希望をお待ちしています(野村)



みらい

編集・発行 神奈川県助産師会 広報委員会 横浜市中区富士見町3-1 総合医療会館6階 Tel 045(262)4201 Fax 045(348)9020 (受付時間 月~金 9:00~17:00) ホームページ http://kanagawa-josanshi.com/ メール office@kanagawa-josanshi.com

少子化の時代に、子どもの健全な成長を願って

公益社団法人神奈川県助産師会 会長 村上 明美



去る2019(令和元)年6月2日に、神奈川県助産師会立とわ助産院の開院10周年記念祝賀会が開催されました。開院にあたりお世話になった元神奈川県産婦人科医会会長の東條龍太郎先生(東條ウィメンズ・ホスピタル院長)、開院時から継続して嘱託医をお引き受けいただいている熊切産婦人科院長の明石敏男先生はじめ、設立時にご指導・ご協力をいただいた会員、学校の先生方、企業の方々にご参加いただきました。皆様方のこれまでのご厚情に心より感謝申し上げます。

祝賀会では、とわ助産院の10年の歩みを振り返るとともに、助産院の今後の安定的かつ発展的な活動に向けて相互に語り合い、とても素敵なお時間を過ごすことができました。これまで10年間、助産院のために尽力してくれた山本年映院長、矢越アヤ子助産師には、今までの頑張りに敬意を表するとともに、これからも一層の活躍を期待しています。

さて、過日、厚生労働省より2018(平成30)年の出生数が92万1000件と発表されました。2017年の94万6000件でしたので、2万5000件も出生数が減少したことになります。日本産科婦人科学会が2019年に出したビジョンの1つに「2030年に90万件の分娩に対応する」がありますが、対応する産科医師の問題ではなく、根幹の出生数から崩れようとしています。

少子化がさらに進む中で、乳幼児の虐待、母親の育児不安、産後うつなど、子育てを取り巻く様々な問題が、頻りに社会の中で取り上げられています。これらの問題は、多様な要因が複雑に絡み合っていて、助産師のみで対応するには限界があります。多職種と連携・協働してチームとして対応しなければ、問題が大きすぎます。それぞれの専門職が支援の方向性を共有し、一致させて、細やかにかかわることで、健全な母子・父子・親子関係の発展につながっていくと考えます。

子どもと家族が健やかな生活を送っていくためには、専門職である助産師の果たす役割は大きく、特に、母親が楽しく子育てができるように、出産後早期から助産師が継続的に関わっていくことが大切です。母親が助産師から適切な支援を受けることができれば、地域や社会において孤立することなく、愛情に満ちた子育てを行うことができ、子どもたちの健全な成長につながると考えています。

通常総会報告

総務理事 青島 恵美子



すくすく赤ちゃん献金感謝状贈呈

2019年度の定時総会が6月6日(木)、神奈川県総合医療会館6階研修室で行われました。開会に先立ち、とわ助産院の前身である鈴木助産院の院長、鈴木乙羽先生のご冥福を出席者でお祈りし、続いて村上明美会長の挨拶、日本助産師会副会長安達久美子様からご祝辞を頂きました。そして、すくすく赤ちゃん献金者の表彰と認定NPO法人スマイルオブキッズ様にすくすく赤ちゃん献金が贈呈されました。



総会の様子

総会は熊澤美奈好氏が議長となり、出席者と委任状を含め2分の1以上の出席のもと議事に入りました。2018年度事業報告と収支決算・監査報告は、賛成多数で承認されました。2019年度の事業計画、収支予算も承認されました。昨年度は多くの会員の皆様から委員会活動や事業運営にご協力を頂きました。研修会も多くの会員の皆様に参加して頂きました。今年度も地域の母子やご家族、そして助産師のために、尽力していきたいと思っております。

とわ助産院 開院 10 年を迎えて

賑やかにケーキカット



東條龍太郎先生、明石敏男先生を
囲んで



村上会長と会員の方々の語らい



とわ助産院 院長 山本年映

6月2日、とわ助産院10周年記念パーティーをとり行うことができました。お花もたくさん届き、今とわ助産院のホールは蘭でいっぱい。ご出席いただいた方は東條先生、明石先生はじめ開設にあたり、出資していただいた方々、学校の先生など42名。和やかで素敵な会になり、皆様に支えられていることを実感しました。

平成21年6月1日開設し、初めての分娩は8月でした。その後すこしずつ軌道に乗り、昨年度までに450件のお産を取扱いました。今の周産期事情を反映し分娩は減少していますが、産後ケアのニーズが高まり、利用は増加しています。助産師として母子のために何をすべきかを常に考え、今まで以上地域に根付いた母子支援をし、新しい助産院の形も模索しながら次の10年20年を目指していこうと考えています。

4月にご逝去された鈴木乙羽先生の助産院を残したい“思い”を引き継ぎ、その名の通り永遠に引き継がれる助産院であるために、後輩育成にも力を注ぎ、また1歩1歩前に進んでいこうと思います。

この10年間支えてくださった会員の皆様、理事、ともに歩んだスタッフに深く感謝します。ありがとうございました。今後もとわ助産院を宜しくお願い致します。

未来戦力理事 布施明美

神奈川県助産師会会立とわ助産院が10周年を迎え、6月2日に記念式典を行いました。

神奈川県助産師会が10年先を見据え設立したことは、大変先駆的で、価値のある取り組みであったと考えます。

これまで450名のご家族と出会い、安全でその人らしい出産を支え、女性としての心に残る出産を支援してきた歴史が、記念式典での山本院長の講演から伝わってきました。

また昨今は、産後支援の入院が増加し、ますます母子支援活動を広げ取り組んでいる心の温まる報告でした。さらなる発展をお祈りいたします。

スタッフ 矢越アヤ子

鈴木助産院で母乳外来をさせて頂いたことが縁で、鈴木乙羽先生の妊婦健診やお産に立ち会うことができました。産むということが自然で力強く、家族を巻き込んでのお産に圧倒されたのを覚えています。私が出会った最初で最後の、お産婆さんの姿だったと思います。出会った頃の先生は80歳位で、膝を大分悪くしていました。そして常々、「この助産院を誰かに引き継いで貰いたい。先代からあるこの地は、ずっと母子のためにあった。母子の為に守って欲しい。」と話されていました。

当時は会立助産院設立に反対もあったと聞いています。しかし、鈴木先生の思いは私達助産師の願いでもありました。たくさんの方に支えられて「とわ助産院」が産まれたのだと思います。ちょっと心配なことがあれば気軽に立ち寄れる、そして安心出来る場がありますよと伝えていきたいです。

スタッフ 石田英子

とわ助産院に入職したてですが、10周年に立ち会え光栄に思います。山本院院長と矢越さんが鈴木助産院を引き継ぎ発展させてきた道程は、困難の連続だったと思います。お二人はよく討論をされますが、細かな疑問もとことん話し合いを繰り返し運営しています。嘱託医の先生と連携を密に行い、母子の安全を第一に、地域の方々の信頼関係を造り上げたのだと考えます。入職初日に関わった分娩では、妊婦のお二人への信頼が「産む力」を引き出すさまに感動し、自然分娩の出来る助産院の存在は必須と感じました。

また、とわ助産院には多くの方々が乳房ケアに訪れてきます。私自身も経験のある堤式で奮闘中です。非常勤スタッフの活躍も絶大です。最近は産後ケア事業でステイ・デイの利用も増えました。先日利用者の方に「この助産院は、実家に帰って来たようで安心します。」と仰って頂き有難く感じました。今後は出産だけに限定されない女性の一生に関わるサービスに対応していきたいです。

開院当時の理事の方々



明石先生からのお言葉

